

A-3 患者に寄り添う良き医師を目指して～倫理観を磨き続ける大切さ～

¹⁾ 獨協医科大学医学部1年, ²⁾ 同 基盤教育部門,
³⁾ 同 語学・人文教育部門, ⁴⁾ 同 外科学(肝・胆・脾)
 木村里央子¹⁾, 栗原涼輔¹⁾, 後藤帆香¹⁾, 鈴木咲空¹⁾,
 丸山琉那¹⁾, 江原峻真¹⁾, 奥田竜也²⁾, 廣田美玲³⁾,
 磯 幸博⁴⁾

【目的】今回私たちは、将来患者に寄り添える良き医師になることを目指し、医学生としてどうあるべきかについて見出すことを目的とした。

【方法】講義「フィクションとファクトから学ぶ移植医療I」を受講し、小説『わたしを離さないで』（フィクション）や移植医、ドナー経験者の話（ファクト）を通して移植医療の現状や問題点を学んだ。さらに受講後、PBL方式で調査や議論を重ね、学びを深めた。

【結果と考察】『わたしを離さないで』ではドナーになるために生まれたクローン人間が育てられ、クローン人間やその臓器がモノのように扱われる理不尽な世界が描かれている。輪読を通してこの小説の世界の倫理観は私たちの生きる現実の世界でのそれとの間に大きなズレがあること、また倫理観は立場や環境によって揺らいでしまう不安定さがあると気付かされた。圧倒的にドナー不足となっている日本の実情をはじめとする移植医療の現状や諸問題など、ファクトに基づく学びを踏まえると、小説で描かれているような世界は簡単に現実のものになってしまうのではないかと考えられた。科学技術だけが発展し、倫理面を蔑ろにする物語の世界が現実にならないようにするためには、倫理に真摯に向き合い続ける姿勢が重要であることに気がついた。

私たちは将来医師となった際、社会と患者との間で高度な倫理的問題に向き合うことになることと予期される。しかし、倫理観は環境や立場、感情によっても揺らぐ可能性があるため、患者に寄り添える良き医師となるには公正かつ高い倫理観を身に付ける必要があると感じた。

【結論】医学生である私たちは、日々のニュース等を通して情報を集め自分の意見を持ち、他者と話し合い倫理観について考える機会を増やすことなどを通し社会の倫理観と自身の持つそれとを照らし合わせることで、医師として持つべき倫理観を磨き続けるなければならないと考えた。

B-4 気道における SARS-CoV-2 の entry factors およびウイルス複製の臓器指向性

獨協医科大学 耳鼻咽喉・頭頸部外科学
 中山次久, 春名眞一

Severe acute respiratory syndrome coronavirus 2 (SARS-CoV-2) の臓器指向性を明らかにすることは、COVID-19 の病態の理解のみならず医療関係者への感染のリスク軽減にも寄与する。我々は、SARS-CoV-2 に最初に暴露される気道とその周辺臓器の正常組織標本（鼻腔、上咽頭、舌、中/下咽頭、喉頭、食道、気管/気管支、結膜）および COVID-19 感染症患者の剖検例の組織標本（鼻腔、舌、咽頭、喉頭、気管）を収集した。各組織の Entry factors および SARS-CoV-2 spike mRNA の発現を各臓器で比較検討するため、免疫組織化学染色で SARS-CoV-2 の entry factors である ACE2・TMPRSS2 の発現、*in situ* hybridization で SARS-CoV-2 Spike mRNA の発現を評価した。また、公的データベースに登録されている頭頸部（鼻腔、舌）および下気道（気管、気管支）の組織における single-cell RNA sequencing のデータを統合し、各組織の ACE2・TMPRSS2 の発現を検討した。その結果、ACE2・TMPRSS2 の発現は各臓器において違いがあり、特に鼻腔粘膜における TMPRSS2 の発現が高値であった。一方、SARS-CoV-2 の感染は全ての臓器において認められたが、鼻腔および気管粘膜において感染が顕著である一方で、舌粘膜においては有意に鼻腔・気管粘膜と比較して SARS-CoV-2 Spike mRNA の発現は低く、SARS-CoV-2 は鼻腔および気管粘膜に指向性を有していた。